

# 大学生におけるアスリートと非アスリートの

## パーソナリティ特性の違い

スポーツマネジメントゼミナール 1314003 井手 友紀子

### 1. 研究動機・研究目的

近年、大学運動部での活動経験のある大学生アスリートを積極的に採用しようとする企業が増加してきている。就職活動の際にアスリートブランニングやスポーツナビといった体育会所属者限定で登録できる就職活動情報サイトもあり、体育会限定の説明会などが開催されるなど、実際に学生自身も必要とされているということを実感している人も多い。アスリートは部活動を通じてどのような特性が見えてくるのか、またそれは個人競技や団体競技といった競技特性、競技継続年数、競技レベルによって何か変化が見られるのかについて興味を持った。また、非アスリートのなかでもマネージャーや主務、トレーナーのようにアスリートとしてではなくスタッフとして運動部活動に所属している非アスリートにも、アスリートや運動部活動に所属していない非アスリートと何か性格に差があるのではないかと興味を持った。アスリートと非アスリートのパーソナリティ特性の違いを明らかにすることによってなぜ必要とされているのか、また非アスリートにはない特性は何なのかに興味を持ち、本研究に着手することとした。

本研究の目的は、大学生におけるアスリートと非アスリートのパーソナリティ特性の違いを3つの尺度で測定し差を明らかにすることである。またそれに加えて非アスリートの中でも主務やマネージャー、スタッフの役割を担い運動部活動に所属している人にも特有のパーソナリティ特性を明らかにすることで、競技をしているアスリートとの違いも検証することとした。分析を行う際には、1) 一般的性格の個人的属性や競技歴、競技レベル、競技継続年数の違いの検証すること、2) メンタルヘルスにおける個人的属性や競技歴、競技レベル、競技継続年数の違いの関係を検証することの2点に着目して研究を進めた。

### 2. 研究方法

本研究の調査対象者はJ大学スポーツ健康科学部に在籍する2年生108名、3年生33名、4年生7名の合計148名であった。

本研究の調査期間は2017年10月17日から2017年10月24日の8日間であった。

本研究の調査項目は、1) 個人的属性、2) 一般的性格、3) スポーツ選手のメンタルヘルス（競技場面）、4) スポーツ選手のメンタルヘルス（日常生活のコントロール）についてであった。

調査対象者の一般的性格はBig Five尺度（和田, 1996）を、調査対象者のスポーツ選手のメンタルヘルス（競技場面）とスポーツ選手のメンタルヘルス（日常生活のコントロール）はスポーツ選手のメンタルヘルス評価尺度（村上・徳永・橋本, 2001）を使用し、Google Formを使用し、Web アンケート調査を行った。

### 3. 主な結果と考察

仮説1では、一般的性格を示す因子において、アスリートは非アスリートと比べて高い数値となると仮定した。しかし結果は、一般的性格の有意な差は見られず、仮説は支持されなかった。これは、調査対象者がスポーツ健康科学部に所属している人であったため、非アスリートとはいえスポーツとのかかわりが密接にあり、有意な差が出なかったことも考えられる。

仮説2では、アスリートの中でも個人競技と団体競技では「調和性」や「自己理解」「個性の発揮」「積極的思考」「チームへの適応」の項目で有意差が見られると設定した。しかし結果からは個人競技と団体競技で有意差は見られず仮説は支持されなかった。しかし、「自己理解」「個性の発揮」「積極的思考」の項目で無所属の人と所属している人の中には有意差が認められた。つまり、競技の種類によって協調性が高かったり自己理解が出来ていたりするのではなく、競技をしていること自体にそのような性格を育む効果があると考えられる。

仮説3では、選手とスタッフでは「挑戦的態度」「個性の発揮」「積極的思考」の項目で有意差が見られると仮定した。結果は「個性の発揮」の因子のみ有意差は認められたがその他の因子においては有意差が認められなかったため、仮説はほぼ支持されなかった。スタッフは部活動を動かすための事務作業や選手のケアなどを自発的に行っていかなければうまく組織が機能しないという重要な役割を担っているためアスリートに似たような得点になったのではないかと推測される。

仮説4では、継続年数や競技レベルは主にスポーツ選手のメンタルヘルス（日常生活のコントロール）の各因子において有意差が見られると考え、競技とのかかわりの強さや触れている時間の長さでパーソナリティに変化が生じると仮定した。結果は、スポーツ選手のメンタルヘルス（日常生活のコントロール）のすべての因子に有意差が認められたわけではないが「酒・タバコ」「睡眠」「間食・嗜好品」の因子において競技年数や競技レベルによる差が見られた。しかし長く競技を続けていけばいくほど得点が高くなる、競技レベルが上がれば上がるほど得点が高くなる、という結果は見られなかった。このことから、競技をやっている人の中で意識の差はあるものの、競技レベルが高い人と出場していない人の間にできる差には大きく影響しないのではないかと推測し、仮説は支持されなかったといえる。

### 4. 結論

本研究でパーソナリティ特性は、アスリートと非アスリートの間には有意な差があまり見られなかった。しかし、アスリートの中で競技継続年数や競技レベルといった競技環境などによって有意な差が見られた。また、非アスリートの中では無所属の人と運動部活動のスタッフの間に有意な差が見られた。これらから、調査対象を学外に広げることで今回有意差が見られなかった一般的性格の因子において有意な差が見られる結果になったかもしれないと考える。

### 5. 卒業論文の執筆を終えて

アンケートにご協力いただいた先生方、J大学の皆様、お忙しい中ご指導いただきました指導教員の小笠原先生、論文作成や分析方法などに関して多くの助言をいただいたスポーツマネジメントゼミナールの大学院生の方々、本当にありがとうございました。